

明治・大正期における「良妻賢母」主義と高等女学校生徒の実践意識 — 校友会活動としての「演習會」の考察から —

A Schoolgirl's Practical Consciousness about 'Good Wife and Wise Mother Education'
in the Meiji and Taisho Periods

井上好人 (人間科学部こども学科教授)

Yoshito INOUE (Faculty of Human Science, Department of Child Study, Professor)

〈要旨〉

明治・大正期の高等女学校生徒は、自分たちの学校生活に何を見出し、自身の将来にどのような漠然とした自己像を描いていたのか。この問題は「良妻賢母」思想の浸透過程として研究が進められてきたが、小論は日常的な人間行為のモデルとしてA.ギデンズの「言説意識 (discursive consciousness)」に対する「実践意識 (practical consciousness)」の概念を用いて考察した。具体的には、石川県立第一高等女学校の「校友会」活動に着目し、生徒たちが「良妻賢母」主義の規範に代わるどのようなオルタナティブ (alternative) な志向性をもっていたのかを明らかにした。生徒たちは己の将来の「妻」や「母」に立脚するよりも、そこからできるだけ距離を置いて、日常性からの離脱とそれに伴う自立的な生き方を希求しようとしていたことが析出された。

〈キーワード〉

「良妻賢母」主義, 実践意識, 校友会, 高等女学校

1 はじめに

明治期の高等女学校生徒は、自分たちの学校生活に何を見出し、自身の将来にどのような憧れを描いていたのだろうか。また、学校にあって彼らを導く教員たちは、生徒たちにどのような環境を提供しどう関わってきたのだろうか。この問題は、当時の支配的な言説である「良妻賢母」主義の浸透過程として、高等女学校の設立を契機としたその制度化と教育内容の変遷を追いながら、同時に、影響力のあった教育家や思想家の語り分析される中で研究が進められてきた。

戦前の「良妻賢母」主義とは、その理念の完成形を示せばおおそ次のようなものであった。女性の本分は、妻として夫に敬愛随順するとともに、母として「祖先の後継者を作り、将来御恩に奉公する国民を育てる」(『臣民の道』昭和16年)ことである、という思想である。深谷(1998)によれば、このような思想は、女性の国家的な貢献を重視している点において、儒教的な女性像や西欧的な感情とも異なり、「日本の近代化が生んだ特異な思想」(14頁)であるという。

高等女学校令を契機に各県で続々と高等女学校の設立さ

れていく中、「良妻賢母」主義がどの程度生徒に浸透していったのか、これを測ることはなかなか困難である。「ほとんど浸透していなかった」(深谷, 196頁)との指摘もある一方で、表象レベルで「良妻賢母」主義が大きく表れていたことを立証する研究が多い。例えば、唐澤(1979)は、国定教科書に登場する女性人物の一覧から、「やはり何とんでも多くのパーセンテージをもって出揃っているのは良妻と賢母群である」⁽¹⁾と指摘し、「更に高等女学校時代になると、それが修身、国語、作法を主とする教科で一そう徹底して実践的に教えられたのである」(87頁)と結論づけている。

一方、当局が目指す女子教育のねらいは、あくまでも知識を実生活に応用できる実用性が最も大切であるとされ、学問でもって高邁な真理を希求したり自己の生き方を追究するようなものであってはならないとする立場であった。そうすると、学校現場にあっては教師たちは「良妻賢母」主義の浸透のために腐心し、生徒たちは実践知の修得を奨励され、望ましい態度形成のために指導されてきたことになる。果たして、生徒のほうでもこの思想を規範として内面化させ、近い将来の目指すべき自己像として措定してい

たのだろうか。

近年、こうした問題関心から従来の研究蓄積を見直していく動きが盛んである。すなわち、良妻賢母主義教育によって国家の意図に沿う形で家族が再編され個人が国民として編入されてきた、といった国家からの一方向的な影響を強調する見方への異議申し立てである。広田（1991）も指摘するように「イデオロギーとしての良妻賢母主義分析の手法には、その論理上の機能を析出することはできても、具体的な個人々の心理まで検証するものではないという制約がある」（138頁）からである。そして広田は、良妻賢母主義の上からの浸透とは逆の「下から支えた心情と論理の究明」が必要であることを訴える。

また、女学生の嗜みや彼らの周囲に関わる人間関係に着目した研究として、稲垣（2007）や佐藤（2006）による女学生文化の一連の研究があり、今田（2001）による少女とその家族の心性についての表象分析がある。後者は、明治後期から刊行されてきた少女雑誌（『少女の友』）を題材としたもので、彼女たちが親への孝行から解放され、自由を謳歌しながら自己実現を追求する主体となったがゆえに国家へ奉仕する担い手に成り得た、というパラドックスを示して見せた。こうした見方は、国家から個人へ、という単純な図式を退け、国家と個人的情緒の間の相互作用的な関係に着目するものである。

小論もこの観点から「良妻賢母」主義を検討するが、日常的な人間行為のモデルとしてA.ギデンズの「言説意識 (discursive consciousness)」に対する「実践意識 (practical consciousness)」の概念を用いて言及したい。具体的には、高等女学校で活発に繰り広げられてきた学校行事、とりわけ「校友会」の活動に着目する。高等女学校生徒の態度や価値判断は、学校で毎日会話を交わし活動場面を共有している身近な教師や級友たちとの濃密な関係の中で形成される場合が多いと考えられるからである。校友会は、生徒の全くの自治組織であったというよりも教員と共に活動する親睦団体であり、しかもかなり活発に学校行事としてあるいは日課として活動がなされていた。教員にとって比較的裁量の幅が大きく生徒と自由に交流する校友会活動は、儀式の中での上位者からの「訓話」やあるいは壁面に飾られている「校訓」のような類よりも、もっと直接に人格的な影響力をもっていたにちがいない。それゆえ、この活動を分析すれば、女学生だけでなく教員も含めて彼らが、“雄弁な”「良妻賢母」主義に対してどのような“寡黙な”実践意識 (practical consciousness) を形成していたのかが明らかになるだろう。また、彼らが「良妻賢母」主義の規範に対し何らかの距離を置いていたとすれば、彼らに影響を与えていたオルタナティブ (alternative) な志向性の在りようが明らかにされる期待もある。

対象とする学校は、石川県立第一高等女学校である⁽²⁾。同校は、1898（明治31）年に金沢市高等女学校として設立され、1901（同34）年に県立に移管、1913（大正2）年に石川県立第一高等女学校と“ファースト”の冠が被せられた。そして、同校の「校友会」の詳細は、同窓会誌の記事を用いる。同誌は、1902（同35）年に『同窓會報』として発刊されて以来、年1回ずつ刊行されてきている（1910（明治43）年から『済美会誌』と改名。以下、『会誌』、発行年を省略し号数のみ記載）。その中で、『会誌』第3～7号、第9～10号、第12～13号を用いる。

次節（第2節）では、同校の校友会活動の組織の概要からその性格を述べ、第3節で、同校校友会が主催した「演習會」の詳細について分析し、「良妻賢母」主義の規範がどのように表れているか、あるいは表れていないのか、検討する。

2 高等女学校の2つの顔

ある人の価値志向が彼の周囲を取り巻く社会的要因から影響を受けていることは論を俟たない。高等女学校生徒の場合、生徒の態度や価値志向は、毎日の授業（学科目）を別にすれば、次の2つの要因から影響を受けている。第一は、儀式の中での上位者からの「訓話」をはじめ公式カリキュラムに則した活動での内容要因である。あるいは壁面に飾られている「校訓」のような類もこれに含まれるだろう。第二は、学校で毎日会話を交わし活動場面を共有している身近な級友や課外での教師との相互作用の中で形成される内容要因である。後者は前者に矛盾しない形で接続されている場合もあるし、対照的な関係になっている場合もあるだろう。

両者の関係に着目するのは、当時の高等女学校が正課のカリキュラムのほかに相当な時間が課外の行事や儀式、校友会活動そして遊戯などに費やされていたからである。また、広田（1991）の指摘する通り、高女は特定のイデオロギーや確固とした教育方針が定まって学校運営がなされていたというよりも、漠然とした「人格形成」を目標にゆるやかに組織化されていたことも踏まえると、各府県の高等女学校ごとに両者の内容とその関係を分析する必要があるからである。その上で、前者について石川県立第一高等女学校の場合も「良妻賢母」主義が標榜されていたこと、後者について同校の校友会組織が充実していたこと、から両者が対照的な性格を帯びて学校内で共存していた感があることを示しておきたい。

2-1 儀式での「良妻賢母」主義の表明

同校が、儀式などの公式な場で「良妻賢母」主義がどう語られ、生徒がどう応えてきたのか、この証左をみつける

のはごく簡単な作業である。次の例を挙げておけば十分だろう。

石川県の教育界においても当局は、あくまでも日常生活に役立つ実践知の修得を要求していた。例えば、1908（明治41）年、石川県立高等女学校創立十年記念式で、知事の代理として来校した事務官の言葉がそれである。「女子教育の進歩は祝すべき事なれども今日の學問が男女と云はず實際に遠かれるを非難せられ殊に女子の教育は實用を重んじ一意専心其學びにし智識を實際に應用すべし」。この内容は、同日の午後、記念式の余興として開催された音楽会に先立ち来賓として招かれた石川県師範学校長の演説内容とぴったり一致している。「現今女學生上りの夫人は實用の智識に乏し、學問とは徒に高きを説くものに非ず。極めて卑近なる所に於て容易に知識を求め得るものなり、即ち日常些細の事たりともよく注意し、學理を應用するこそ眞の學問なれ。世の女學生たるもの、卓上の空論に走らすして學理をよく應用せられん事を希望す云々」（石川県立高等女学校、1908、『創立十年記念誌』、4頁。）

いずれも、演壇に立った指導者は、女学生の身に付けようとしている学問や知識を「徒に高きものを説く」傾向があるものとして戒め、實用＝良妻として・賢母としてこれを用いるべきだとする主張である。こうした規範は、表立った儀式においては、生徒自らが表明することも一般的だった。卒業式の送辞で在校生が先輩諸姉にむかって「良妻賢母の模範を示して美はしき家庭を作り給ふ」⁽³⁾ことを期待するといった表明である。

2-2 生徒－教師の親睦組織としての校友会

公式に表明される「良妻賢母」の規範を、生徒たちはどう感じ、彼らの身近にいて指導する教員はどう捉えていたのだろうか。十分に内面化して日々の言動や活動にも表れていたのだろうか、あるいは何らかの違和感や距離感を抱いていたのだろうか。もし後者ならば、彼女たちにはオルタナティブ（alternative）な志向性があったのだろうか。

明治期の教育機関の場合、とりわけ高等女学校では「校友会」活動を中心とした諸行事を分析することが有効な手立てである。校友会は、生徒の全くの自治組織であったというよりも、身近な指導教員と共に活動する親睦団体であり、生徒と教員のいわば本音の領域を垣間見れる期待があるからである。また、高等女学校では受験や進路指導に労力を費す必要が教師にも生徒にも希薄であったり、対外試合に駆け回ることなく、校友会活動は、日々の放課後の習慣として、また学校行事の主催セクションとして校内で大きな存在意義が与えられていたと考えられるからでもある。

同校の校友会も「職員生徒一同の組織」⁽⁴⁾を謳っており、

運動系と文化系を含めて3つの部で構成されていた。第一部として朗読、談話、唱歌、第二部として体操、遊戯、庭球、弓術、第三部として點茶、插花、詠歌、の計10サークルである。その目的は、「本會ハ本校教育ノ主旨ニ基キ善良ナル品性ト開快ナル氣風ト強健ナル身体トヲ養ヒ兼テ職員生徒間並ニ学校家庭間ヲ親密ニセンコトヲ圖ルモノトス」と謳われ、ここからも、修養团的な性格ではなく⁽⁵⁾、生徒たちにとって、学科目や日常生活にはない身体の所作や文化の香りを、顧問教師の人格的影響を受けながらに享受できる場であったことがわかるだろう。

榎田文（1904年入学）は、テニス部と園芸部の両方に所属していた。園芸部は学校園で草花の手入れをすることが主な課題であったが、回顧録にはその箇所は描かれず、土曜日の午後に顧問の風見なつ（博物学）と共に大乘寺公園や卯辰山へ遠出をして植物採集へ出かけ、標本づくりに勤しんだことが印象的に語られている。「上級生の中には、珍しい植物の、部分写生の拡大したものを描いて、掛図を幾枚も作った人もあった。東京か、奈良の女高師へ進学するのだという、うわさであった。」（榎田、27頁）と回顧しているように、顧問の風見の専門性が個々の生徒の興味関心を喚起し、互いに日常生活に大きな意味をもたらしていた。

このように、校友会活動は、教員にとって職務から比較的自由に距離を置き、専門教養を生かすことのできるチャンスでもあって、生徒の興味が己のほうへ近づいてくることを喜び励みにしていた。規約では、生徒と教師および学校と家庭の「親密」な関係づくりを意図する親睦組織であることが表明されていたが、榎田の園芸部の場合のような教師とのマッチングが上手くいっている場合だと、教師から生徒への人格的影響は大きかったと捉えてよいかもしれない。

生徒は通常会員、教員は特別会員とされ、会費も前者は一カ年50銭、後者は一カ年月給百分の一を払う仕組みになっており⁽⁶⁾、制度上からも校友会は教員と生徒による趣味を媒介にした親睦組織の色合いが強かった。

3 オルタナティブ（alternative）な志向としての「演習会」

いわゆる学芸会の成立は、明治後期の1900年から1910年代だといわれている（山本・今野、352頁）。石川県立第一高等女学校の場合、「演習会」（「学芸演習会」とも呼称される）は、「運動會」、「弓術會」と共に「校友會」の主催行事として位置づけられ、1898（明治31）年に金沢市高等女学校として創立された時に開催されて以来、毎年続けられてきた。1908（明治41）年の規程をみれば、「校友會規程」第6条「本會ニ於テハ時々演習會運動會等ヲ催シ保証

人其他校外ノ人ヲ招クモノトス」とある。慣行として、「運動會」は春季に「演習會」は秋季に棲み分けられ、後者は学業での成果発表の要素を交えた全校あげての文化祭の趣であった。

会場は、1906（明治39）年までは「生徒控室」⁽⁷⁾で、1907（明治40）年からは「体操室」で、1910（明治43）年からは同年に新築された済美堂で開催されてきた。舞台での演目発表のほか、他の校舎内の場所を利用して生徒の「成績品」（歴史図、裁縫品、図画、習字、生花、作文等）が展示されてもいた。また、教師の指導が前面に出るよりも生徒の自主的な取り組みを良しとし、生徒のほうでもその力が発揮されたことを自慢とする雰囲気があった（「此度の會は、少しも師の君の御力を借らで、又々生徒間に於て考へ為える者なり」（『會誌』）。

このような「演習會」の開催形式（会場配置、飾り付け）と発表内容（演目、出演者、寸評）を分析することで、生徒とこれを指導する教員の、意図して言語化されにくい「実践意識」を析出してみよう。

3-1 会場の装飾と配置から

まず、会場の装飾や配置はどうなっていたのか。

会場入口や舞台正面に掲げられる標語の類は、毎年折々に選ばれる言葉を変えながら書かれていた（現代の文化祭のテーマに相当する）。例えば、1905（明治38）年は、会場入口に菊花でもって「朝益暮習」の4文字を装飾し2文字ずつ分けて配置されていた。出典は中国・春秋戦国時代の思想家・管仲の文章で、「朝に益し暮に習い、小心翼翼」と書き下し、学んだその日のうちに復習すれば、心にも翼が広がるような感覚が広がっているいく、という意味である。旧米沢藩の藩校・興譲館の「学則」にこの文からの引用があり、当時としては比較的よく知られた格言だったのかもしれない。翌1906（明治39）年は、演台の正面壁に「學以美其身」の書（教員・小川直子の筆）が掲げられた。その出典は『荀子』勸学篇の「君子之学也，以美其身。小人之学也，以为禽犢」（君子の学は，以て其の身を美しくす。小人の学は，以て禽犢と為す）だと推測される。いずれも「学問」へ向き合う心構えを漢籍から引用された言葉であり、「良妻賢母」主義に言及したり関連づけられたりする言葉はみあたらない。

さらに、会場が新築なった済美堂に移った1910（明治43）年は、石川県知事の李家隆介を来賓として迎える記念的なものであったが、会場の装飾は華美にならないように抑えられたものであった。正面の舞台には絨毯が敷かれ、右手側に黄白紅樺の菊花と盆栽、左手側にピアノとオルガンが配置され、「他に何等の装飾をも加へざりしは自ら彼の校訓に適ひたるの感あり」（『済美會誌』第9号，9頁）

とあるように、清楚な雰囲気の中で舞台が映える仕掛けが上手く工夫されていた。翌1911（明治44）年も同様に装飾は施されず幾鉢かの菊花が並べられたのみであった。

3-2 演目と発表内容から

次に、演目とその内容にどのような特徴が見られるのかみてみよう。

1914（大正3）年、11月3日の天長節の祝日、済美堂にて「演習會」が開催されたことを伝える記事がある（『済美會誌』第13号）。朝9時から午前部、午後部が終了するのは16時半から17時であり、演目の本数も40ほどもあり、たいへん多い。演目を分類すれば、「唱歌」（6本）や「演奏」（2本）などの音楽表現もあるが決してメインではなく、歴史的な説話や御伽噺に題材をとった国語表現的な発表が多い。後者に属するものをさらに分類すると、一人で発表する「談話」（15本）、「暗誦」（2本）、「英語暗誦」（2本）、「朗読」（1本）が全体の半分ほど生まれ、次いで、複数人で発表する「対話」（4本）、「対読」（4本）、「問答」（1本）が組まれていた。

「談話」の本数が多いのは、「歴史」や「地理」をはじめ「理科」、「裁縫」、「家事」など、おそらく教科目から漏れなく採ることを予定していたからかもしれない。しかし、内容には偏りがあって、「談話」の中で多くを占めるのは、日本の「歴史」に題材をとったものである。「大高源吾の母」（赤穂浪士の逸話）、「大塔宮熊野落」（太平記の一節、後醍醐天皇の皇子・護良親王の故事）、「女丈夫梶子」⁽⁸⁾（江戸時代の歌人で寺子屋を開いた田村梶子）、「納豆中尉」⁽⁹⁾「一少年は、老ひたる母の為に納豆を売り歩いて生業せる哀れの身なりき。されど或る軍医の慈悲によりて嬉しき結果を得たり。げに孝行の徳なるかな」。世界の「歴史」に題材をとったものとしては、「ナポレオンの母」（「レツチアは世界の豪傑を生みしなり。否ナポレオンも初めより豪傑たるにあらざり。之に於てか母の感化の偉大を感ず。談話の整ひたるは一層此の感を深からしめたり。」）、「鐵砲の傳來」。他に「地理」として、「闘牛の話」（「スペインの勇ましい闘牛の話」）、「大日本帝國について」（「如何ぞ我が國民は活然として居らるべき、實に勢ある話ぶりにてよくはげまされたり。」）、「日月の蝕」。「理科」として、「金属の錆」、「鮎の解剖」（「解剖しつゝ、掛圖など用ひてよく話されたり。」⁽¹⁰⁾）があった。

他の年度で演じられた「談話」のテーマをみてみると、1910（明治43）年の「ジャンダーク」（ジャンヌ・ダルク）のような伝記物も多いことを指摘しておきたい。ジャンダークは、ナイチンゲールと並んで明治期の理想的な女性像の典型だった。1901年～1902年にかけて東洋社から出版された『西洋傑婦伝』では、第一編が「ジャンダーク」、第

二編が「ナイチンゲール」、第三編が「マリア・テレザ」となっている。石川県立第一高等女学校での演目も、こうした流行を反映しているのかもしれない。ちなみに、この日の「ジャンダーク」の寸評として、「其人の功績も演者が巧みな話振りによりて一層余光を添へられたるの感ありき」¹¹⁾と好意的な文が添えられている。

さて、同年度の「暗誦」の演目をみると「近江八景」、「労働雑詠」（「農家の秋の労働の様いと巧に誦ぜられたり」島崎藤村の詩）が、「朗読」として「本田兵作と其の愛馬」（出典不明）が、「英語暗誦」として「Tick Tock Sasy Clock」^(ママ)、「Sing a Song to Me」がそれぞれ演じられている。

これらの演目リストから、われわれは、学問や教養に関連する科目が多く、これに対して「裁縫」や「家事」といった良妻賢母に関わる実用科目からの発表が各1本ずつと少ないことがみてとれよう。「裁縫」からは「ねび糸しらずの裁方縫方」と題されたもので、寝冷えのしないベビー服の裁ち縫いの方法を語る趣向だったと思われる。「家事」からは「器具の取扱」と題されたもので、「家庭に於ける有益なる話、一々実験をなされつゝ上手にのべられたり」と感想が添えられているように家事道具に関する説明であろう。これら「裁縫」や「家事」からの演目は毎年決められたように1本ずつと抑えられており、その内容も合理的科学的に物事を説明しようとする姿勢が保たれ、なんらかの道徳的な意見を表明するような性格ではなかった。

これらのような一人で演ずる「談話」や「暗誦」に対し、二人（またはそれ以上）で行う「対話」や「対読」もある。ドラマや演劇といった出し物はなく、当時、「対話」がこれに代わるものであった。その理由として、富田（1998）は、女学校ではミッション・スクールなど一部の学校を除けば「芝居をやるというのには抵抗があった」ことを指摘している。「芝居＝演劇は、河原乞食ともよばれる賤民階級の所業であって、良家の子女がやるものではないという考え方が根深く残っていた」（富田、44頁）というのである。つまり、「対話」や「対読」は、「演劇」に至る過渡期の現象としてこの時期の学校行事に特徴的にみられたものであったらしい。

巖谷小波はこの種の「対話」の脚本を書いたが、それはドイツでの学校訪問の経験からヒントを得たという。「私は先年伯林に居た間によく女学校同窓會などに招かれたが其たびに見せられて少からず興味を感じたのはこの対話と云ふものであつた。蓋し彼地では少女の會話修練の爲めはた社交の豫習の爲めに学校でも奨励して居る位である。よい事ならば真似しても可からうと思つてかう云う物を出す」（巖谷（1911）、「はしがき」）。巖谷の書いた「対話」は女学生の日常をコミカルに風刺したものが多。例えば、『少女對話選』に収録されている「新入生」には、さ

る上級生が校長室でみかけた「山出しの下女」を新入生と誤解して交わされる会話が掛け合い漫才風に進んでいく。「それから裁縫や音楽もあるてせう?」「大砲なんざ見度くも無エですよ。」と学科目である「裁縫」を「大砲」に掛けて「見たくもない」と語らせているところが女学生の本音をうまく突いている。

だが、石川県立第一高等女学校の「対話」は巖谷風のコミカルなものではなく、シェークスピアから能楽まで古典文学に典拠した劇作を熱演したり、教科目の内容のおさらいをしたりする生真面目なものであった。前後の年度で『會誌』に記されている演目を列記してみると、「リヤ王領地分配」（明治37年、7名で演じられた）、「山伏接待」（同年、6名：義経記に依る「安宅」の番外編と推測）、「地理対話 和蘭」（明治43年、オランダの地形について「今夏関東東北地方の水害より語りはじめ和蘭の地理に及ぼしたるは面白き思付きなりしも折にはせき込みたる語句のありしは惜しかりき」¹²⁾。「地理歴史 印度につきて」（同年）、「歴史対話 蘇我氏滅亡につきて」（同年）、「The Man and the Money」（大正2年、4名）、「家庭のしをり」（同年、3名）、「衣服の調整にきて」（同年、3名）、「Not Afraid too More」（同年、4名）、「The Lost Money」（同年、3名）、「木綿の洗濯」（同年、3名）、「リンコルン」（同年、2名、アブラハム・リンカーンの伝記）、「利息算」（同年、2名）、「マツチについて」（同年、2名、「むつかしき化学の話にもかゝらず聴者をあかしめざりしは佳」との寸評あり）。

次に「対読」の演目をみてみよう。「安宅」（『義経記』などに取材した能楽作品で、勧進帳はこの『安宅』を元に創られた歌舞伎の演目）、「長柄堤の訣別」（「長柄堤訣別の場」のこと。坪内逍遙の『桐一葉』（『早稲田文学』に1894（明治27）年11月から1895（明治28年）9月まで連載）の一場面である。歌舞伎として1904年（明治37年）3月、東京座で初演された。江戸幕府が豊臣家を滅ぼした大阪の陣での豊臣家の忠臣片桐且元の苦渋を描いている。当場面は、最終幕である第六幕のエンディングで、木村長門守重成と片桐且元の二人の武将の別れのシーンである。）、「熊野」（能楽の「熊野」のこと。平家物語から題材がとられた作品。）、「小野深雪」（詳細不明）。また、「問答」として「算術問答」（詳細不明）があった。

最後に、音楽関係としてまず「唱歌」が、「才女」（アイルランド民謡をもとにJohn Douglas Scottが作曲した“Annie Laurie”（アニーローリー））、「漁父」（ノルウェー民謡、武鳥又次郎・山田源一郎編『女学唱歌』第二集（共益商社）（1901年）に収録）、「浦のあけくれ」（Joseph Mazzinghi作曲、吉丸一昌作詞。原題：“Ye Shepherds, Tell Me”，『中等音楽教科書（四）』1910に掲載）、「富士の巻狩」（源頼朝の故事になぞらえた唱歌か）、「家路」、「秋のみの

り。「音楽演奏」として、オルガン独奏とピアノ連弾があった¹³⁾。

以上のような「演習會」の演目は、当時の学科目の授業時間数と比較してどのように偏っていたのか。

表1に示す「学科課程及毎週教授時数表」(『創立十年記念誌』1908年)から比較してみよう。するとまず、演目で「体操」がないことは言うまでもないことなので、これを度外視すれば、教授時数が多いわりには「裁縫」や「修身」での発表が少ないことが改めてわかる。井上(2005)でも指摘されていた女学生たちを悩ませてきた「裁縫」は、毎年の「演習會」でまるで申し合わせたかのように一本ずつしか演じられていない。これに対して、「音楽」の演目が多いのは、学年単位の大人数での発表が可能であり、また華やかさを演出する格好の演目であることを鑑みれば了解されるだろう。そして、談話や朗読、あるいは対話の形式で、歴史的な説話にもとづいた歌舞伎、能、御伽噺の題材が好んで演じられていることから、「歴史」や「国語」の教養科目の比率がきわめて高いことがわかる。また、「英語」での対話や暗誦にも相当力が入っていることもわかる。

表1 学科課程及毎週教授時数表
(『創立十年記念誌』1908年)

(学年)	1年	2年	3年	4年	計	割合
修身	2	2	2	2	8	7%
国語	6	6	5	5	22	18%
外国語 (英語)	3	3	3	3	12	10%
歴史・ 地理	3	3	2	3	11	9%
数学	2	2	2	2	8	7%
理科	2	2	2	1	7	6%
図画	2	2	2	1	7	6%
家事			2	2	4	3%
裁縫	5	5	5	4	19	16%
音楽	2	2	2	2	8	7%
体操	3	3	3	3	12	10%
教育				2	2	2%
計	30	30	30	30	120	100%

発表内容に踏み込んで分析してみても、貞節に言及したり「良妻賢母」主義を訴えたりするようなプログラムは入っていない。ジェンダーにこだわらず学問芸術分野の主人公やエピソードを純粹に演じようとする意気込みがみられる。また、女性を取り上げる場合も、「家庭」という囲いではなく、具体的な職業を想定するわけでもなく、社会

の中で自立し、女性ならではの価値を模索しながら普遍的な生き方を希求しようとする態度が伝わってくる。「良妻賢母」という新しい時代に要求される思想は、確かに生徒たちにとって現実的な自己の将来像を見据えるためには拠り所とすべき規範ではあり、「言説意識(discursive consciousness)」の水準においては無視することができなかった。それゆえ「良妻賢母」主義を忌避する態度をあからさまに表明することはタブーであったろう。しかしながら、「演習會」のプログラムの選好傾向からは、「良妻賢母」の規範を巧妙に回避しようとする態度が垣間見られ、またそこに教員と生徒の共同作業を通じた“隠れた意図”の痕跡が窺えるのである。

3-3 誰が出演できたのか

各学年別の全体合唱を除いて、個人やグループでの出演者は、第3～4学年の生徒を中心に第1～2学年と補習科の生徒まで含まれていたが、その総数は64名であった。在学生の総数がおよそ500名であるので、舞台上に立って発表できるのはわずか13%に過ぎず、多くの生徒は学年別合唱の出番まで観客として夕刻までの長い時間を着座していなければならなかった。

個人発表者はどのように決めていたのか。この点についてははっきり掴みきれないが、樫田文の回顧を引用しよう。「三年の二学期、校内学芸会が催された。私は、四、五人で対話することになっており、練習していたが、福見先生から、独唱するようにと言われた時にはびっくりした。もう一人独唱するのは、奥村男爵家の令嬢下枝さんである。聞こえた美人で、声も美しい。まるで比較にならない。先生もずいぶん皮肉だと、心の中で当惑した。奥村さんは、「更けゆく秋の夜、旅の空の」という「秋の夜」、私は「故き妹」というホ短調の、スペインの曲であった」(樫田、30頁)¹⁴⁾。

樫田は、詩や和歌を詠み、小説を新聞社に投稿する文学少女であった。このエピソードは、自他ともに国語の得意ことを認める彼女が対「話」に出演することは衆目の認めるところであったろうし、また音楽教師が「独唱」を勧めたのも、後に彼女が東京音楽学校へ進学することを鑑みれば、それだけの才能を見出されていたことを物語っている。演習会で発表のチャンスを与えられることは、学業での個人の成果を称える場として、生徒も教員も暗黙のセレクションの作業として同意されていたのではないか。

この点をデータから裏付けてみよう。

1913(大正2)年の『演習會』を伝える記事(『会誌』12号)から、演目の発表者のほか開会の辞などを述べた生徒の成績評定の傾向を析出してみる。全体合唱を除く個人出演者の数は68名であり、そのうち成績評価などのデータが判明

できるのは1911（明治44）年以前の入学、つまり第3学年以上の生徒47名である。この47名の成績を、同世代の在学生徒全体の成績分布と比較する⁶⁵。同世代とは、1909（明治42）年～1911（同44）年までの入学生は483名（うち卒業生355名、中途退学者および死亡者128名）とした。成績評定は、卒業時の各科目10段階評定の平均点とし、中途退学者および死亡者は事由発生時点の成績をとった。

その結果、全体の成績平均が7.9であるのに対し、出演者の成績平均は8.4であり相当優秀であることがわかる。図1の箱ひげ図からも、分布の傾向として出演者のほうが上位に偏っていることがみてとれる。また、成績が9.0以上の優秀者が47名中8名いるが、全体では483名中33名しか与えられていないことを考えると成績優秀者の占有率が高いこともわかる。

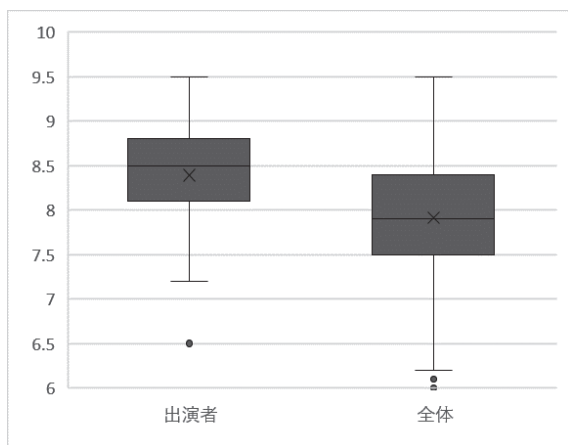


図1 「演習會」出演者の成績分布

さらに、「操行」評価もみてみよう。これは「甲・乙・丙」の3段階で記載されているものであるが、全体では「甲」が与えられる比率は30%ほどにすぎない（149/483名）。出演者の「甲」比率は50%（24/47名）であり、もしオルガンやピアノ発表者を除けば58%を占めている。

以上から、「演習會」に誰が出演できるか、という（生徒にとって）切実な問題については、学業に秀でていること、これに品行の良いことか音楽の才能のあることかの条件を満たす、メリトクラティックな選別が意識させていたことがわかる。

そうすると、「演習會」とは、国語、英語、地理、歴史、音楽と関連をもった「教養」や「技芸」のための行事であり、授業で抜きん出た才能を発揮することはもちろんであるが、日常生活においても、文章を書いたり小説を愛読したり、外国人のもとへ英語を習いに行ったり、ピアノや箏曲に親しんだりする嗜みをもった生徒にとって格好の晴れ舞台の行事であった。いいかえれば、「良妻賢母」主義が表明されその規範の重要性を言説レベルで確認される儀式的行事や修身授業に代わるオルタナティブ（alternative）

な志向の受け皿として「演習會」は機能していたのである。

4 考察

西洋の未知の地や偉人に憧れ、歴史のロマンや御伽噺の世界に触れることを楽しみとする——このような生徒にとって、憧れのモデルを自ら演じ語るチャンスとしての「演習會」は、女学校時代の彼らに与えられた特権的な場であった。「良妻賢母」主義は、確かに、近い将来に訪れる現実的な問題を捌いていける有効な方便ではあったろう。しかし、生徒たちは己の将来の「妻」や「母」に立脚するよりも、そこからできるだけ距離を置いてモラトリアムの世界に留まろうとしていたかのようである。

では、彼らの想定する「良妻賢母」主義に代わるオルタナティブな志向性とは何だったのか。また、そのような態度に彼らを駆り立てた背景に何があるのか。

まず、第一の点について、彼らがジャンダークやシェークスピアの劇作に登場する女性の物語に言及したり、あるいは歌舞伎の舞台や歴史語りをお攫うことにどんな思いを感じていたのか、と問うてもおそらく彼らからの答えは返ってこないだろう。「実践意識（practical consciousness）」の水準は、行為者が自ら言説化しにくいけれども何となく感じている暗黙知のレベルであるからである。とはいえ、当時の女学生に支持された言説をみることに意味がないわけではないだろう。

そこで、『済美會誌』第10号に掲載されている土屋いと「女子の本分」（1911、22-27頁）という論説をみてみる。これは、彼女が、1911（明治44）年、同窓会主催の「秋季常集會」⁶⁶（10月14日開催）で「談話」として発表したものを文字起こしして掲載されたものである。同年の集會は、女子高等師範学校や音楽学校へ進学した卒業生の談話やオルガン演奏、四高教授で国語学者の八波則吉による「文学」に関する講話、医師を招いての「衛生」に関する講話、金沢商業学校長の「人は誰も或る信念に基きて凡ての境遇に對して生産的に働き、且樂觀し送るべし」と題する講話が主たるプログラムであった。土屋いと氏は、明治42年第四学年編入、明治43年卒業、明治44年当時は補習科を出たばかりの頃であった。東京出身であった同氏の齒に衣着せぬ物言いが新鮮で当時の女学生の内心の本音が表出されているように思える。経験談ではなく書物を読んだ概略と感想を自分なりの視点から整理してまとめた体裁となっている。論旨は、「女子が世を渡っていく」ことを前提にその価値や意味を考える、というものである。社会に自立した女性がどのような分野で貢献していけるのか、その場合、女性であることのどのような特質を踏まえるべきなのか、その志の在り方・向け方を模索している。

事例として挙げられる女性像のモデルは、次から採られ

ている。シェークスピアの作品で表象される女性像、コヴェントリー・パットモア (Coventry Patmore, 1823-96) の詩集『家庭の天使』(The Angel in the House, 1854-62), そして“An angel is the person who fights for the person who anguishes, not the person who scatters a beautiful flower”の言葉で知られるナイチンゲール, である。このような女性像を引用することは当時のいわば流行に沿ったものであった。ジェンダー研究からの評価としては、女性が家庭という牢獄の中に閉じ込められ不自由な生活を余儀なくされることへのエクスキューズ言辞にすぎない, などの批判がある一方で, 単なる「良妻賢母」の通俗的な意味を超えて, 「彼女たちの献身の中に, 陰なる支配と自立の萌芽を垣間見ることができる」(西垣, 1999) と評価するむきもある。小論では, 土屋氏の言明に, 必ずしも個別的な職業ではないにしても, 日常性からの離脱とそれに伴う自立的な生き方を希求しようとする志向性を読み取りたい。彼らの学業への傾注と「演習會」等への熱い取り組みは, この自立に向けた奮闘努力とリンクしていると解釈することができるからである。

第二の点については, 実用知から距離をとるような態度や慣習は, 家庭環境で育まれたハビトゥスが関与する形で「実践意識」が形成されていたことを指摘しておきたい。井上(2004)において次の仮説が提示されていたことを想起しよう。すなわち, 「女学生の家庭の教育観と学校の要求する規範との間に相克があったのではないだろうか」という点である。例えば, 「良妻賢母」主義を実用知たらしめる「裁縫」は高等女学校では必須の学科目であり, また, 伝統的には近世以来の女性の徳目の一つである「婦功」(あるいは「婦工」)の意味が込められていたはずであった。すると, 儒教徳目の延長線上で「良妻賢母」を理解することも可能であった。だが, 当時, 娘を高等女学校へ進学させるような社会層—例えばその中核を占めた士族層—にあっては家事や裁縫, 料理などの実用知を修めていくことへの動機付けがあまりなかったのではないか。「息子を旧制中学に進学させ娘を高等女学校に入れる」¹⁾という学校

選択を行う家庭では, 男子であれ女子であれ, 家庭の躰においては礼儀作法と並んで学問を大切にすることが重んじられたからである。多くの女学生の放課後, 家庭生活での教養や嗜みは, 琴曲や点茶などの「遊芸」であったり, 英語や数学の「学問」であったりした事実がこれを裏付けている。つまり, 彼らは幼少期から家庭で培われた躰によって形成された「実践意識」の水準で, 「良妻賢母」主義に異議申し立てをしていたのである。

では, 生徒のこういう「実践意識」を薄々感じていた教員の態度はどうだったのだろうか。先の論文で井上が「総じて教師は生徒の校外生活には敏感であり, 遊芸や文芸に対しては冷淡, 学問へは中立, そして家事と裁縫は奨励するという態度で介入」(241頁)という指摘には条件を付ける必要があったわけだ。すなわち, 『学級台帳』の記載から窺えた教師のこうした態度は公式カリキュラムに則した“表”の指導の一側面であって, ちょうど儀式などで当局の代表者や校長が述べる「良妻賢母」主義の奨励に対応するものであったということである。

ところで, 樫田文は, 自身が書き記した小説を密かに回覧雑誌や東京の雑誌に投稿していた。あるとき, 北國新聞新年号の懸賞小説に入選して氏名が公にされ学校にバレてしまうという事件が発生した。恩師の風尾に呼ばれたときのエピソードを想起してみよう。「風尾先生は『作文がうまいというのは前々から聞いていたが, 小説とはね』と言って, にこにこしながら, 『学校にいる間は, 新聞や雑誌に出すのは, 控えることね。校長先生も心配してみえたから』」(樫田, 前書, 28頁)と囁いたという。このように, 校友会活動で育まれる生徒—教師関係からは生徒の「実践意識」に対する教員の心情的な支持がみてとれるのである。

そのように考えると, 学問を重んじる家風で育ってきた子女が, 学校生活において, 「言説意識」の水準では「良妻賢母」主義を語り, 「実践意識」の水準ではこれを拒否する, という二重戦略は, 結果としてその後の人生を成功に導いたのかもしれない。

注

(1) 国定教科書は, 昭和戦前期まで第1期から第5期まで区分される。以下の通り。第1期:1904~09(明治37~42)年, 第2期:1910~17(明治43~大正6)年, 第3期:1918~32(大正7~昭和7)年, 第4期:1933~40(昭和8~15)年, 第5期:1941~45(昭和16~20)年。ただし, 昭和戦前期までを通した唐澤の調査と小論が対象とする時期とは異なることを付記しておきたい。その上で, 集計結果を紹介しておく, 修身教科書でナイチンゲールと昭憲皇太后が一位

と二位, 国語教科書で水兵の母, 天照大神, 紫式部, 山内一豊の妻の順になっている。「水兵の母」は, 1903(明治36)年からの第1期国定教科書の『高等小学読本』に「感心な母」として登場し, 第2期(1910(明治43)年~)の国定国語教科書(『尋常小学読本』)から「水兵の母」として掲載されたものである。日清戦争に従軍していた水兵が母からの手紙を読んでいるシーンが描かれ, 「一命を捨てて君恩に報いよ」との文面が軍国主義社会での臣民としての在り方, 賢母としての在り方のモデルを示していた。このような「水兵の母」のような「軍国美談」が教科書の教

- 材として全国の学校で用いられてきたことについて、これまでの教育史研究は厳しい評価を下してきた。たとえば、「純粹無垢の少女の胸に、それが母たるものの理想像としていかに強く美化されて映じたことであろうか。このような国家主義、軍国主義に基づいた教材が、漸次、女性からその本来もっているヒューマニティを抹殺して非人間的性格に作りかえて行った」（唐澤，92頁）というように。ここでは、軍国主義＝賢母像が女性の本来的に保持しているヒューマニティと対峙される。だが、言説研究で問われるべきは、女性の「本来もっているヒューマニティ」が歴史的にどのように語られてきたのか、また受け手である当の女性たちが双方の言説をどのように自ら受けとめてきたのか、ということだろう。支配的な規範言説がそのままの意図で受容され個々の女性たちが内面化していったと措定するのはあまりにナイーブな議論である。
- (2) 同校を対象とした一連の教育社会学的分析は、井上(2004)および井上(2008)を参照されたい。
 - (3) 卒業式で、第四学年生徒総代の言葉である。同窓の卒業生を指して、「世の所謂良妻賢母の模範を示して美はしき家庭を作り給ふもあり、或は進みて高等の教を受け身を立て名を掲げ御國の為に盡し給ふもありて……」と述べられた。（『創立十年記念誌』21頁）。
 - (4) 鷺田幾子「本学の近況」『同窓會報告』第3号（明治37年）
 - (5) 修養団的な機能を担ったのは「矯正會」で、これは生徒のみの自治的な組織で、各学級から代表者を出し、補習科の上級生が主宰するものであった。「各級の全体に関する欠点を矯正し風儀を正し品位をすゝめんことを」を努め、これには教員は干渉せず、時々決議録を点検し誤植を訂正する程度であった（鷺田，前掲書）。
 - (6) 教員の給料からみて「百分の一」の水準はどの程度の金額だったのだろうか。「公立學校職員俸給令（明治36年4月施行）によると、正教員ならば初任の十一級の月25円から一級の月75円まで幅があるが、年棒の1%ならばおよそ3円から6円を会費として払っていたことになる。これは、ざっとみて生徒の10倍前後の負担額となる。ちなみに、徳光編（1953）によれば、明治42年に小学校教員年功加棒の改正が行われた際に本科正教員の俸給も上昇し、一級で95円となっている（158頁）。
 - (7) 「生徒控室」では、運動器具や楽器も置かれており、毎日の放課後、主に雨天時に生徒たちが職員と共にダンスや縄跳び、羽根つき、ピンポンなどを楽しんでいた。掲示板には金言や格言の掲示があったり絵画や写真も貼られ、時々新しいものに変えられるなど工夫されていた（島栄「本校の近況」『同窓會報告』第4号）。島氏は插花教師。「あそびながらにして一種の智識を得べきやうにせられたり」。（鷺尾幾子「本校の近況」『同窓會報告』第3号）。鷺尾氏は地理教師。
 - (8) 「梶子」とは江戸期の民衆教育家「田村梶子」のことである。以下、『朝日日本歴史人物事典』を引用しておく。「田村梶子：没年：文久2.9.15（1862.11.6）。生年：天明5（1785），江戸後期，上野国桐生の買次商田村林兵衛の妻。寺子屋松声堂を営む。田村家の長女として生まれ，17歳で幕府大奥に出仕，祐筆を務める。文化12（1815）年31歳で帰家し夫林兵衛を迎え，家業にしたがう。松声堂での教え子は100人以上を数え，女子が多かったが男子も教えた。手本として自筆のいろは歌，各種往来物，古今集の写しなどを与

え，手習い，初歩の和歌，和文，礼儀作法などを教授した。国学者橘守部より和歌を学び，桐生における有力門人のひとりとなり，師の高い評価を受け，守部の編んだ歌集『下蔭集』には詠草35首が収められている。＜参考文献＞高井浩『天保期，少年少女の教養形成過程の研究』（林玲子）。引用終わり。

- (9) 出典は不明だが，大正2年に日吉堂から出版された花咲次郎編『少年少女お伽会 飛行機の破壊』中に「納豆中尉」が収録されているので，この物語を指すのではないかとと思われる。
- (10) 「」は、『會誌』記事の短評を引用。
- (11) 佐々木頼子「演習會の記」『済美會誌』第9号，11頁。佐々木氏は4年次在籍の生徒。
- (12) 前書。
- (13) 以上、『同窓會誌』第14号から。
- (14) 奥村氏が歌ったのは「旅愁」。P.オードウェイ（John P. Ordway）の作品に犬童球溪が訳詩をつけて，1907（明治40）年に『中等教育唱歌集』に収められたものである。また，榎田氏の歌ったスペイン民謡「故き妹」とは，その後，1919年に「更けゆく鐘の音 思いうつせみの果なき面影 結びもあえず……」と訳され有名になる「故小妹」（1919年，惟一倶楽部による訳詞）のことではないかと推測される。
- (15) この資料は、『学籍簿』および『学級台帳』から作成したデータベース全体から作成した。データベースの詳細は井上（2004）に記載されている。
- (16) 同窓会の集会は，年4回あり「新年常集會」，「春期常集會」，「夏季総集會」，「秋季常集會」と呼ばれていた。ゲスト講師を招いての講話あり，卒業生や在校生の余興あり，茶華や昼食も供され，華やかな雰囲気の中で旧交を温めるイベントとして盛會を呈していた。
- (17) 井上による石川県立第一高等女学校の『学籍簿』を用いた論考で，「家族構成欄」から「兄」の居る家庭を対象に彼の教育程度を分析した結果，女学校利用層が旧制中学利用層と重なっていたことが示唆されている。つまり，このような社会層は，家庭の教育的土壌として実学ではなく教養や学問を志向する文化資本を保持していたということである。

参考および引用文献

- 深谷昌志，1998，『良妻賢母主義の教育（教育名著選集②）』黎明書房。
- ギデンズ，A.，2015，『社会の構成』（門田健一訳），勁草書房。（The constitution of society：outline of the theory of structuration.，Polity Press，1984.）
- 広田照幸，1991，「学校文化と生徒の意識」，天野郁夫 編，『学歴主義の社会史—丹波篠山にみる近代教育と生活世界』有信堂高文社，136-152頁。
- 今田絵里香，2001，「近代家族と少女の「国民化」——少女雑誌『少女の友』分析から」『教育社会学研究』68，225-242頁。
- 稲垣恭子，2007，『女学校と女学生—教養・たしなみ・モダン文化』中央公論新社。
- 井上好人，2004，「「操行」査定からみた女学生の中途退学—明治期の石川県立第一高等女学校の事例」『教育社会学研究』74，229-247頁，日本教育社会学会。
- 井上好人，2005，「明治期商工業層とその子女の高等女学校進

- 学の相関関係：石川県立第一高等女学校の事例による仮説」『ソシオロジ』50(2), 37-51頁, 社会学研究会。
- 井上好人, 2008, 「明治期高等女学校卒業生における同窓会活動の意味と機能—石川県立第一高女同窓会誌の「会員消息」記事の分析から—」『教育社会学研究』83, 149-168頁, 日本教育社会学会。
- 巖谷小波, 1911, 『少女對話選』誠文館。
- 掛水通子・山田理恵, 2011, 「明治後期における高等女学校体操科受持ち教員の実態について：「体操ハ成ルヘク女教員ヲシテ之ヲ教授セシムヘシ」の実現状況」『体育学研究』56巻2号, 451-465頁。
- 唐澤富太郎, 1979, 『女子学生の歴史』木耳社。
- 樫田文, 1971, 『晩霜』樫田文/横浜(自費出版)。
- 木村涼子, 1989, 「婦人雑誌にみる新しい女性像の登場とその変容」『教育学研究』第56巻第4号, 11-21頁。
- 木村涼子, 2010, 『“主婦”の誕生—婦人雑誌と女性たちの近代』吉川弘文館。
- 小山静子, 1991, 『良妻賢母という規範』勁草書房。
- 松野修, 2013, 「19世紀の日本におけるナイチンゲール伝：明治期国定修身教科書におけるナイチンゲール像分析のための予備的考察」『愛知県立芸術大学紀要』(43), 31-43頁。
- 室井研二, 1997, 「A. ギデンズにおける「実践」」『社会学評論』48巻1号, 18-31頁。
- 中内敏夫, 1988, 『軍国美談と教科書』, 岩波書店。
- 西垣佐理, 1999, 「「家庭の天使」から「白衣の天使」へ—Little Dorrit にみる nursing の実践をめぐって—」『関西学院大学英米文学』第43巻第1号, 59-71頁。
- 佐藤八寿子, 2006, 『ミッション・スクール』中央公論新社。
- 関水徹平, 2016, 『「ひきこもり」経験の社会学』左右社。
- 数土直紀, 1997, 「ギデンズの構造化理論」井上俊 他編『現代社会学の理論と方法(岩波講座 現代社会学 別巻)』岩波書店, 217-229頁。
- 徳光八郎 編, 1953, 『石川県師範教育史』金沢大学教育学部明倫同窓会。
- 富田博之, 1998, 『日本演劇教育史』, 国土社。
- 土田陽子, 2014, 『公立高等女学校にみるジェンダー秩序と階層構造』ミネルヴァ書房。
- 若桑みどり, 2001, 『皇后の肖像—昭憲皇太后の表象と女性の国民化』筑摩書房。
- 山本信良・今野敏彦, 1987, 『近代教育の天皇制イデオロギー—明治期学校行事の考察』新泉社。